幕末開港期から明治時代の神戸の英学・英語学校について：私立学校を中心として

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 隆 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4793

幕末開港期から明治時代の神戸の英学・英語学校について
—[1] 私立学校を中心として—

学芸学部　国際英語学科　杉浦　隆

要旨：安政の五カ国条約の後、兵庫の代わりに神戸が開港地となった。海外との通商にあたり、英語の必要性が説かれ、兵庫に英語学校が設立されたがその後、まもなく廃止された。神戸には外国人居留地だけではなく、「雑居地」の設定も行われた。この居留地、雑居地を中心に明治の初期からキリスト教宣教師が英語を教授する学校の設立が相次いだ。居留地返還後は日本人による学校も設立されたがその多くは明治年間に廃止、廃校となった。兵庫、神戸の住民の気質の違いも影響し、明治年間を通じて、兵庫よりも神戸に学校が多く設立された。

キーワード：神戸、幕末、明治、開港、英学、英語教育

0. はじめに

日本の開国は 1853 年 7 月 8 日（嘉永 6 年 6 月 3 日）のアメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが 4 隻の黒船を伴い、伊豆の浦賀に来航にしたことで始まった。この来航の目的は大統領の親書を幕府に届けることであり、翌年の再来航を予告して、日本を離れた。翌 1854 年（嘉永 7 年）予告通りに来航したペリーは、3 月に幕府との間に「日米和親条約」を締結し、日本は開国することとなった。（アメリカ船への食糧及び燃料補給と、下田、箱館（函館）の開港が取り決められた。）その後、イギリス、ロシア、オランダとも同様の条約を締結した。しかし、この「和親条約」には通商、関税に関する取り決めがなかったため、1858 年 7 月 19 日（安政 5 年 6 月 19 日）に改めて、「日米修好通商条約」を締結して、新たな開港場（神奈川、長崎、新潟、兵庫）の開港と居留地の設定、領事裁判権の設定、日本側の関税自主権の放棄が定められた。

江戸幕府はその後、オランダ、ロシア、イギリス、フランス、とも同種の条約を結んだ。

1.「神戸」開港の経緯[2]

1.1　開港延期

兵庫港（兵庫津）については、この修好通称条約により、1863 年 1 月 1 日をもって開港することが決定した。

しかし、開国についてはすぐには勅許が得られず、国内に開国派と尊皇攘夷派の対立、騒擾が起こり、「安政の大獄」、「桜田門外の変」などの事件が起こり、開港を予定通り進めることが困難になった。幕府は 1861 年（文久元年）使節団をヨーロッパに派遣し、開港の延期を交渉させ、5 年の延期が認められることになった。このうち、兵庫の開港は 1868 年まで延期された。

1.2「神戸」の開港

幕府はすでに交易が盛んで人口の多かった「兵庫津」を開港地にすることを望まず、兵庫に近く、人口も少なく、田畑が広がり海辺に近く、旧海軍操練所の船着場などの既存の施設が利用できる「神戸村」の浜を開港した。また、神戸村に隣接する二ツ茶屋村、走水（はしうど）村を合わせて三ヶ村を合わせて居留地、市街地の造成をすることにした。勅許を得られたのは 1867 年 6 月 26 日（慶応 3 年 5 月 24 日）であり、延期された開講期日の半年前であった。

居留地の範囲は現在の神戸市役所の東側、西側は鯉川筋（現在は暗渠化されて道路になっている）北は西国街道に面した部分（現在、大丸百貨店の北側）で、南は海岸通りに面した、おおよそ 500 メートル四方の区画である。

1868 年 1 月 1 日（慶応 3 年 12 月 7 日）に兵庫ではなく、神戸が開港された。

1.3「居留地」と「雑居地」

勅許の遅れは居留地造成工事の遅れにつながった。開港時までに完成したのは運上所（税関）、三ヶ所の波止場、倉庫三棟だけであり、居留地内部の建設物は未完成のままであった。

条約締約国からは、居留地整備の遅れに対し、不満

が申し立てられた。これに対して便宜の措置として「雑居地」の設定を認めた。

「雑居地」の範囲は（当時の）生田川[3]から宇治川の間、北は山麓まで、とされ、概ね現在の神戸市中央区の西半分に相当する。（地図 1）

この範囲内では日本人が外国人に土地や家屋を貸しても良い、また、外国人が家屋を建てることも自由にできるようになった。

居留地内では領事裁判権が認められる（治外法権）こととなったが、この状態は、1894 年（明治 27 年）の「日英通商航海条約」の締結と、それに続く同種の条約を各国と結ぶことで、領事裁判権は撤廃されることになった。その後、1899 年（明治 32 年）、新条約の発効とともに居留地の日本への返還が決まった。[4]

2. 行政区域「神戸」の成立

ここで、幕末開港期及び明治期の「神戸」、及び「兵庫」と呼ばれる地域の名称についていくつか確認しておきたい。

2.1 兵庫県の設置

1868 年（慶応 4 年 / 明治元年）の王政復古の後に、神戸、兵庫の地域に「兵庫鎮台」が置かれたが、程なく「兵庫裁判所」となり、さらに「兵庫県」が置かれた。（第一次兵庫県）

2.2 神戸市制の施行[5]

「兵庫」、「神戸」はもともと幕府の直轄地であり、大阪奉行所の支配下で「兵庫」に兵庫奉行所が置かれていた。

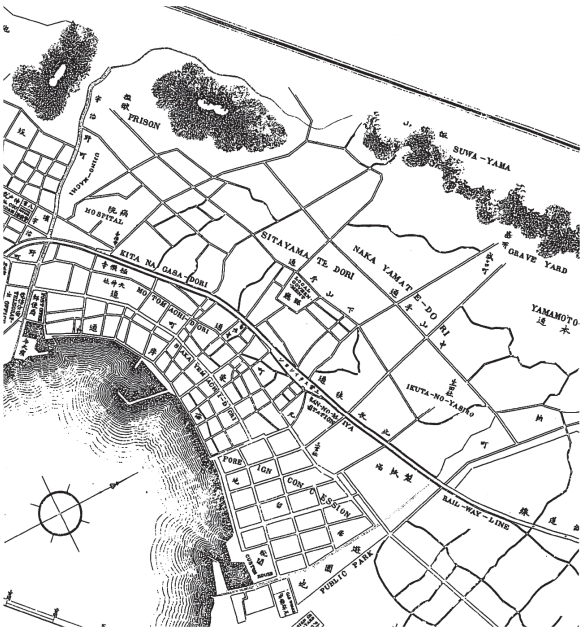
開港当時、「神戸」には海岸の近くには、神戸村、二つ茶屋村、走水（はしうど）村があり、三ヶ村を合わせて神戸町とした。

その後、「神戸町」は北野村、中宮村、花隈村、宇治野村を含む地域に拡大した。

1879 年（明治 12 年）、神戸、兵庫、坂本村が合併し「神戸区」となり、さらに 10 年後、市制の実施に伴い、神戸区は葺合村、荒田村を編入し、「神戸市」となった。

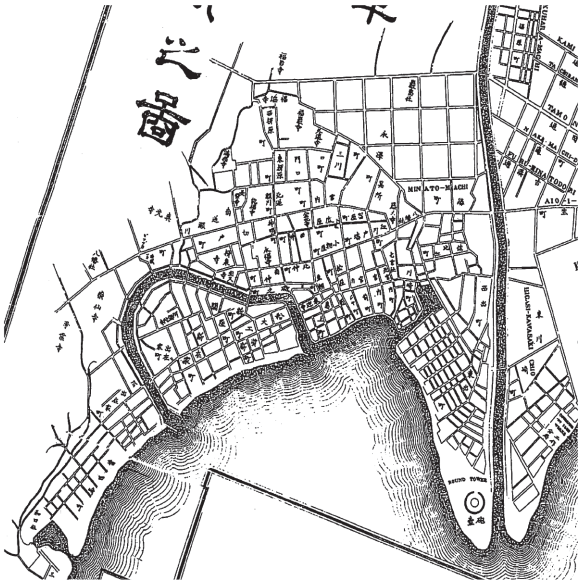
1896 年（明治 29 年）には、湊村、林田村、池田村を編入し「神戸市」はさらに拡大した。

本稿では、行政区域上の呼称としては「神戸市」、「兵庫県」と使用し、地域に言及する場合は「神戸」、「兵庫」の名称を使用する。



地図 1[6]　明治 10 年の神戸市街（居留地と雑居地）

居留地（FOREIGN CONCESSION）の北東側道路から東側の「遊園地」はかつての生田川の川筋であり、神戸の東の境界。雑居地の範囲は居留地外、北は山麓まで、西は地図左側宇治野町沿いの宇治川まで。）



地図 2[7]　明治 10 年の兵庫市街（兵庫港）

地図右側の川は埋め立てて川筋が変わる前の本来の湊川で「兵庫」と「神戸」の境界であった。湊川から東側が「神戸」である。

3. 兵庫、神戸の教育状況

3.1 開港前

開港以前には、日本各地において、藩校、郷学校、私塾、寺子屋などが設けられ、各地で独自の教育が行われていたが、「神戸」、「兵庫」は幕府の直轄地であり、藩校の類はなく、「兵庫」に地元の商人が設立した私塾

や寺院に設けられた寺子屋がいくつか存在した。明治2年調査時点で「神戸」に寺子屋が四ヶ所、「兵庫」に九ヶ所あったことがわかる。[8]

3.2 開港後

3.2.1 洋学伝習所と英語教授の始まり[9]

一方、神戸においても1868年8月「洋学伝習所」(洋学校)が兵庫県によって設立された。これは県庁の係官関戸由義の建議によるもので、慶応年間に鳥取藩が藩士の教育のために神戸村に設けた神戸西の町(現在の元町通3丁目あたり)の校舎を利用したものであった。東京より箕作貞一郎(麟祥)[10]を教師として招き、学則を定め、学力により学生を4つのレベルに分けて教育が行われた。

この施設は、本来、開港後の外国との交易に際し、官吏に英語を習得させるための施設であったが、官吏が公務に多忙で、現場での通訳の希望に困難が生じたため、11月に学校の規模を拡張し、民間にも開放するようになった。さらに12月アメリカ人W.L.ビキロウ(Bigelow)[11]を教授として雇い、校舎を坂本村に新築し1869年(明治2年)1月に移転した。この時、大島益三郎(軍務官訳生)、片寄海造(鳥取藩士)、山田済民(杵築藩士)を英語教授に任用し、吉川敬周(大垣藩士)をフランス語教授に任じた。3月に箕作貞一郎が辞任、帰京した後、5月に伊藤慎蔵(越前藩士)を後任とした。

同年12月、大阪に大阪洋学校が設立され、ビキロウをはじめ、教授人が大阪に赴任したので、洋学伝習所は廃止された。

3.2.2「明親館」の設立

1868年4月、兵庫の豪商岩間屋兵右衛門(神田兵右衛門)らが、兵庫県(当時は兵庫裁判所)に学校設立の建白書を提出した。[12]これにより、同年6月、兵庫に「兵庫学校」が設立された。校舎には当初、旧幕府の函館物産会所が充てられたが、8月に切戸町に移転し、明親館となった。明親館では当初、和学及び漢学が教えられていたが、兵庫県令神田孝平は、時勢に鑑み、外国と通商、交易する上でも英語修得の必要性を説き、1872年3月文部省に上申し、フランス人トロンクワ(De Tronquios)[13][14]を雇用して英語の教授を始めた。

次節で述べるように、洋学校は再開されるのだが、1873年(明治5年)の学制発布により程なくして明親館に統合された。明親館自体は学生発布後、10月に明親小学校となり、兵庫神戸で初めての公立小学校となった。

3.2.3 洋学校の再開と廃止[15]

この間、神戸港の貿易高が伸びる中、外国人との交渉において、口頭でのやりとりの正確さが必要になった。内容によっては取引相手との訴訟のリスクもあったため、大意を伝えるだけでは不十分であり、外国語の能力が必要になってきた。1872年3月、神戸松屋町の兵庫県の官舎を校舎に充てて、洋学校が再開された。1873年5月英国人イートン(Issac Eaton)[16]を雇い入れ、教授内容の刷新を計ったが、同年、学制が発布され、在来の教育機関、学校類が一旦廃止と決まり、洋学校は10月に明親館に併合された。

4. 開港以降の英語教育諸学校

開港以降、神戸において、各種の英語教育機関が設立されたが、特に外国人キリスト教宣教師による学校設立の例が明治20年代ごろまで盛んに見られた。

4.1 アメリカ人キリスト教伝道師による英語学習所設立[17]

1869年(明治2年)米国伝道会(American Board)から日本へ派遣する最初の宣教師としてグリーン(Daniel Crosby Greene)が任命された。彼は夫人を伴い、11月4日にサンフランシスコを出帆し、30日に横浜に到着した。当初は江戸を中心として布教活動を行う方針であったが、1870年(明治3)年、同じ会派の中国派遣宣教師ブロジェット(Henry Brodget)の進言に従い、西日本を拠点にすることにして、3月に神戸に移り、居留地の北側山麓に近い中宮村に居を構えた。

グリーンの来日時、日本ではまだキリスト教は禁教下にあったが、外国人相手の宣教活動は禁令の対象外であった。グリーンは外国人相手の教会設立を呼びかけた。米国伝導会はグリーンの要請を受けて、1871年(明治4年)3月から翌5年にかけて、ギューリック(O.H. Gulick)、デイヴィス(J.D. Davis)、ベリー(John Cuting Berry)らを神戸に派遣した。

グリーンには側近であり、日本語の教師であった市川榮之助がいたが、彼が聖書を所持していたことで、6月に妻まつとともに投獄される事件が起こった。宣教師団、アメリカ領事館は、兵庫県令神田孝平と交渉し、外務省に夫妻の釈放を求めたが、聞き入れられなかった。

結局、11月に榮之助が獄死をしていたことが判明し、妻のまつは程なく釈放された。この一連の事件により、当時欧米視察中であった岩倉具視一行に対する諸外国の態度が悪化し、政府に抗議が相次いだ。この後、1873年(明治6年)2月に切支丹禁制の高札の撤去が発令された。

高札撤去に先立つ1872年（明治5年）12月1日、グリーンら宣教師のもとに10名ほどの日本人青年が集まり、学校が設立された。宇治野村の借家を借りたその学校は「宇治野英語学校」と呼ばれ、デイヴィスが主任教授を務めた。

宇治野英語学校には通学生、寄宿生を併せて40名の生徒が在籍し、午前中に英語の授業、午後にはグリーンによる旧約聖書の講義が行われた。日曜日には、バイブルクラスが開かれ、12名が聴講した。

4.2.3「女学校」の設立[18]

1873年（明治6年）3月31日、米国伝道会からダッドレー（Julia E. Dudley）、タルカット（Eliza Talcott）の2名の女性宣教師が来日し、二人は宇治野英語学校を手伝い始めた。

10月にダッドレー、タルカットは宇治野英語学校から独立して、新たに花隈村前田兵蔵方に学校を設立した。翌1874年（明治7年）4月には、北長狭の白洲退蔵[19]の持ち家に学校を移した。この頃の生徒数は24名あるいは30名と報告され、米国伝道会の報告には「女学校」（ガールズ・スクール）と表現されている。さらに、1875年（明治8年）10月12日に山本通5丁目に「英和女学校」が開校された。当時は「神戸ホーム」ともよばれた、現在の「神戸女学院」である。

4.2.4 その他の会派による学校設立

米国伝道会以外にも様々なキリスト教会派の宣教師が神戸を訪れ、あるいは定住し、布教活動の傍で学校を設立した。

4.2.4.1 カトリック教会

18）カトリックでは、1872年（明治4年）にイエズス会のビリオン神父（Amatus Villion）が来神し、1878年（明治10年）に「幼きイエズス会孤児院」を居留地裏町四十一番に設立した。これがその後発展し進光女学校（真光女学院の記述もあり）となりさらに海星女子学院に発展した。[20]

4.2.4.2 英国聖公会

1877年（明治9年）、フォス（Hugh J. Foss）主教が栄町に乾行義塾という英語学校を設立した。さらに25年に松蔭女学校を開設した。（現在の神戸松蔭女子学院）[21]

4.2.4.3 バプテスト教会

1878年（明治10年）にリース（Dr. Henry H. Rhees）博士が来神し、北野町に居を構えた。自宅を「光景学舎」として開放し、英語、漢文を教授したが、生徒は多くはなかった。[22]

4.2.4.4 アメリカメソジスト教会

J.W. Rambuth（老ランバス）と息子のW.R.Rambuth（若ランバス）は1886年（明治19年）に来神し、居留地47番に居を構えた。同年11月25日に自宅を開放し、「読書館」を設立[23]し、ここでの伝道活動が後のパルモア学院[24]に発展した。

4.2.5 その他の学校の設立（明治20年代まで）

明治20年代までに様々な学校が設立されたが、その詳細は不明なものが多い。中には設立して程なく廃校したものもあり、学校の定着が困難であった状況がわかる。以下に、文献で英語が教授されていたことが確認できる、各種学校について列挙する。[25]

（1）私立乾行義塾（『沿革史』pp.606-607）

1878年（明治11年）英語、数学、漢文を教授する私塾として、栄町に開設された。翌年、1月に三宮町鯉川筋に移転した。当時、神戸に中学程度の教育機関が無く、大阪神戸の商業家の需要に応じて開校した。1889年（明治22年）火災で校舎消失し、中山手3丁目に移転した。しかし、1910年（明治43年）3月　校長　ヒユウ氏の帰国に伴い廃校となった。

その後、在籍していた学生、生徒を収容するため、SPGボイススクールが同じ場所に設立された。その後の経緯は不詳である。

（2）擇善家塾　（『権勢史』p.202）

1894年（明治17年）元町通2丁目に英語、ドイツ語を教授する学校として設立された。廃校年不詳。

（3）神戸女子神学校　（『沿革史』p.672）

1880年（明治13年）、アメリカ人教師、ダッレー、バロス両人の設立に、キリスト教伝道者養成のための学校である。校舎は中山手通6丁目にあった。修業年限は3年で、教授科目は旧約聖書、新約聖書、世界史、教育学、英語などであった。

（4）ホーゲンの英数教授所（『三十年史 坤』p.508）

1894年（明治17年）英国人ホーゲンが北長狭通2丁目に英語、数学教授所として設立された。廃校年不詳。

(5) 三菱の英語教授所（『三十年史 坤』p.508）

1894 年（明治 17 年）、三菱汽船問屋が従業員のために英語と簿記を教授する教室を海岸通 1 丁目に設けた。兵庫では常設の教室はなかったが、島上町の問屋会所を会場にして、毎週月曜日午後 5 時から有志による、経済、法律、倫理等の研究会が催された。

(6) 関西独英学校（『三十年史 坤』p.508）

1895 年（明治 18 年）11 月、元町通 5 丁目極楽寺境内に設立された。学生数はあまり多くなかったようである。設立者、廃校年ともに不詳。

(7) 柳蔭書屋（『三十年史 坤』p.508、『権勢史』p.304）

1897 年（明治 20 年）2 月、下山手通 7 丁目にあった女子校であった柳蔭書屋では、新たに英語、裁縫、編物を教授科目に加えた。

(8) 神戸女子手芸学校（『三十年史 坤』p.509）

1897 年（明治 20 年）、九鬼隆義、佐畑信之、関戸由義、野村致知らは、元町通 4 丁目に神戸女子手芸学校を設けて、8 月 1 日以降、和裁、洋裁、編物、読書、算術、英語を科目に加えた。

(9) 共立英語研究会（『三十年史 坤』p.513）

1897 年（明治 20 年）元町通 4 丁目に、乾行義塾教員の高山時蔵、梅木忠朴らが発起して設立された。以降の状況は不明である。

(10) 神戸英語学会 / 元町の英語学校（『三十年史 坤』p.512）

1897 年（明治 20 年）、佐畑信之を校主として、有志（村上俊吉、長田時行、飯田勇記、原田助、横田勝松ら）はそれまであった、神戸英語学会の組織を変更し、元町通 4 丁目に英語学校を開設した。同年中に坂本村に校舎を移転したが、1899 年に至り、学校の維持が困難となり、廃校状態に陥った。その後、基督教青年会が夜学校として学校の継続を下が、1900 年（明治 23 年）に廃絶となった。

(11) 般若林学校（『三十年史 坤』p.513）

1897 年（明治 20 年）9 月 5 日、西柳原町の福昌寺境内に般若林学校が設立された。教授科目は、英語、漢学、和学、簿記で、修業年限は 6 年であった高等教育の内容を教授することを志向した学校であったが、長くは続かなかったようである。

(12) 親和女学校（『三十年史 坤』p.513）

仏教に基づく学校として、1897 年（明治 20 年）12 月、元町通 3 丁目の善照寺境内に開校した。英学、漢学、和学、数学、和裁、洋裁、家事経済を教授した。維持費は仏教信者の寄付を基本とした。

その後、花隈に校舎を移転し、1892 年（明治 25 年）に一旦廃校となった。翌年、友国晴子が私塾として跡を継ぎ、1896 年（明治 29 年）に下山手通 7 丁目に移転した。

(13) 高山英学会（『神戸港』p.227）

明治 20 年　高山時蔵により、楠町 3 丁目に設立された。修業年限 2 年で、明治 38 年当時の生徒数は男子 20 名であった。

(14) 福原女学校（『三十年史 坤』p.513）

1898 年（明治 21 年）3 月、吉田定兵衛、南都新七、高田嘉介、百瀬徳次郎、長谷川九一郎、津田久吉各氏は、福原町の琴平神社裏手空き地に福原女学校を設立した。校舎の建設には寄付を募った。

この学校は福原遊郭内または市内の芸妓、娼妓に英語、編物、裁縫を教授するためのものであった。月謝は 30 銭であった。8 月に授業が始まったが、翌年夏に廃業となった。

(15) 自助学校（『神戸港』p.227、『統計書』M38 p.74）

1892 年（明治 25 年）脇種熊氏により楠町 3 丁目に設立された。

教授科目は国語、英語、漢学、数学、簿記であった。修業年限は 3 年で、明治 38 年当時の生徒数は男子 160 名であった。

4.2.6 居留地返還以降の学校設立状況

(16) バント英学校（『沿革史』p.684、『市史 各説』p.634）[26]

ジョージ・バント氏により、1899 年（明治 32 年）に中山手通 2 丁目に開校された。『沿革史』によれば、ここでの英語教育は「活用の学問を主眼として時勢に迂遠なるものを排し、実務に適切なる物を掲げて、その応用に務め、バント氏独特の教授法により、興味津々生徒をして倦ましめず不知不識の間に実際活用の妙を会得せしめて学科と相応じて以て社会に立ちて応用活動するの資となさしむ」とある。日常的な話題や活動を通じて、生徒を退屈させることなく、知覚を総動員して、知らず知らずに英語が身につくという指導法と見られる。

（17）以文塾（『神戸港』p.227）

1900 年（明治 33 年）谷熊次郎氏により、永澤町に開設された。英語、漢学、数学を教授科目とした。修業年限は 5 年。明治 38 年当時の生徒数は男子 20 名であった

（18）私立同文学校（『沿革史』p.588）

神戸在住の中国の子弟のために 1900 年（明治 33 年）に中山手通 3 丁目に設立された。高等小学科、夜学科で英語を教授した。

（19）聖瑪利亞女学校（『沿革史』p.595）

1900 年（明治 33 年）12 月 11 日に孤児救済のために居留地裏町[27] に設立された。その後、下山手通 3 丁目に移転した。英語、フランス語、編物、図書、図画、油絵、ピアノなどを教授した。修業年限 10 年である。

（20）ランバス記念伝道女学校（『沿革史』p.688）

1900 年（明治 33 年）10 月 29 日に中山手通 4 丁目に創立し、英語で科目の教授をすることを目的とした。教授科目は日本語、英語、数学、地理、歴史、音楽、編物などであった。

（21）兵庫実用英学会（『神戸港』p.227）

1901 年（明治 34 年）、小野義明氏により、門口町に設立された。教授科目は英学である。修業年限は 3 年、明治 38 年当時の生徒数は男子 17 名、女子 3 名である。

（22）私立神戸英学校（旧バルトン英語学校）（『沿革史』p.608）

1903 年（明治 36 年）、C.H. バルトン氏が花隈町に設立した英語学校である。教授科目は読書、講義、文法、作文、会話、習字、書き取りで、修業年限は 3 年であった。この学校はバルトン英語学校を 1909 年（明治 42 年）に改称したものであったが、設立者バルトン氏が御影に転居するに際して廃校となった。

（23）私立有為学館（『沿革史』p.608）

1903 年（明治 36 年）10 月 8 日、田坂其吉氏が下山手通 6 丁目に設立した。官公立学校や公務員を目指すものの予備教育機関として設立されたものである。修業年限は 2 年で、英語、数学、簿記、漢文などを教授した。1914 年（大正 3）に 10 月 29 日に設立者が所在不明につき廃校となった。

（24）基督教青年会外国語学校（『沿革史』p.676）

1903 年（明治 36 年）に、財団法人神戸基督教青年会が、中山手通 6 丁目に設立した。その後、1911 年（明治 44 年）に下山手通 6 丁目に移転した。教授科目は英語、ドイツ語で修業年限は 3 年で、授業時間は午後 7 時から 9 時までで、3 学期制であった。

（25）私立英清学校（『沿革史』p.680）

1903 年（明治 36 年）4 月に下山手通 4 丁目に設立された。英語、中国語、国語、漢学、数学、珠算、簿記、音楽を専門学校程度に教授した。受験予備科を設けて、入学希望者の指導を行った。

（26）秀成学舎（『神戸港』p.227）

1903 年（明治 36 年）、高柳節三氏により、下山手通 6 丁目に設立された。英語、漢学、数学、理化学、簿記を教授した。明治 38 年当時の生徒数は男子 30 名、女子 2 名であった。

（27）神戸英学院（『神戸港』p.227）

1903 年（明治 36 年）、末兼湊氏により、永澤町 4 丁目に設立され、英学を教授科目とした。修業年限は 3 年である。教員 9 名のうち 1 名がイギリス人である。明治 38 年当時の生徒数は男子 45 名、女子 5 名であった。

（28）明倫学塾（『大観』p.39、『統計書』[28]）

1904 年（明治 37 年）、西出町に設立された。教授科目は修身、国語、算術、地理、歴史、英語であった。

明治 38 年当時の生徒数は男子 30 人、女子 20 人。

（29）私立神戸外国語学校（『沿革史』pp.610-611）

1907 年（明治 40 年）5 月 17 日、櫻井一久氏により中山手通 6 丁目創立された。1909 年（明治 42 年）、10 月 10 日、廃校となった。

（30）私立神戸済美学校（『沿革史』p.609）

1910 年（明治 43 年）7 月 16 日に飯田安吉氏により北長狭通 4 丁目に設立された。英語、フランス語、国語、漢文、簿記、算術、歴史、理科を中等程度に教授することを目標とした。定員 100 名。

（31）私立聖心女学院外国語学校（『沿革史』p.610）

1912 年（明治 45 年）1 月 16 日、神戸在住の外国人女子のための教育機関として、中山手通 2 丁目に設立された。修業年限は 11 年とされた。初等、中等、高等科を

設置したが、1914 年（大正 3 年）7 月 21 日に廃校となった。

4.2.7 設立年不明の学校（明治 38 年～大正元年神戸市統計書による）

（32）兵庫女学校（『統計書』[29]、『大観』p.39）

東出町に設立された。教授科目は修身、国語、算術、地理、歴史、英語であった。生徒数は女子のみ 85 名。

（33）湊西学校（『統計書』M39）

中山手通 6 丁目に設立された。教授科目は国語、英語、数学、漢学、地理、歴史、理科、図画、簿記とされる。生徒数は男子のみ 67 名。

5. 神戸の英語教育まとめ

明治初年から明治期全期間の英語教授を専門とする私立学校設立について、特徴をまとめる。

5.1 学校設置地域の偏り

これまでに掲げた 33 校と 4.2 で述べた初期の学校を含めた 39 校のうち、神戸に設置されたものは 32 校であった。兵庫に設立されたものは 7 校で日本人が主体となって設けられたと考えられる。

神戸が開港地となり、居留地と雑居地が設定されたことで、外国人の活動がしやすくなった。特にキリスト教禁教下ではあったが、外国人相手の宣教、教会の設立が比較的容易に行えた。神戸は在来住民の数が兵庫に比べて極めて少なく、その上、開港に伴う新規事業を求めて、神戸に流入してくる他地域の日本人も多く、既存の宗教勢力の力も弱くいわば、伝統的価値観に囚われない、しがらみのない活動が可能になったと思われる。また、神戸の在来住民よりも、移住者が新規事業に取り組む傾向があった。[30]

他方、兵庫は開港当時すでに、国内有数の流通の拠点として機能しており、2 万余の人口を抱え、余剰の土地も乏しいため居留地の設置から外れた経緯がある。別の言い方をすると、居留地もできず、雑居地にも含まれなかったため、外国人が立ち入ることはできず、また、一般の兵庫の住民も保守的、守旧的であり[31]、新規の取り組みが困難であったことが窺われる。

「又新日報」には次のような投書が掲載された。[32]

兵庫に於いて英語夜学の開設を望む

英語の必要なることは諸新聞記者先生方の縷々論述せられたるを以って今我輩拙き筆に記述するまでもなく諸君は疾くよりより御合点なるべし 而して神戸港に於いては疾くより御気付かれしと見る二、三の英語教授所あり、或いは英語研究会の企て等ありて有志輩の望みを充せり　然るに当兵庫港に於いては未だ一の英語教授所あるを聞かず　我輩の甚だ失望する所なり且又商家主人たるもの顧慮する所あれ　今日灰吹の除掃或いは豆腐買を命ずる丁稚も成長するに随て番頭となり手代となり主家の柱石主人の片腕となるべきの種子ならずや

宜敷幼時（即ち丁稚の時）より之を教育せずして可ならんや　豈等閑に附して丁稚番頭社会にして志あるの輩はスペリング独稽古或いは第一読本（ファーストリーダー）等を購求して独脩する者なきにしもあらずと雖も抑も英語学たるや其発音の困難にして字句の錯節なる為に往々其志をして屈せしむることあり　依って我輩愚考するには兵庫に於いて適宜の家屋を選び二、三の良教師を聘し夜間商家の子弟に教授せられんと切に希望するところなり

兵庫　トウチージャウ氏

「神戸港においては早くから英語教育の重要性に気づき、英語教授所が開かれているにもかかわらず、兵庫港にはそのようなものは一箇所もない。商家の丁稚も将来的はその商店を支える柱となるはずなのだから、早くから英語を修得するほうが良いはずである。ただ、英語は独習が難しいので、少数の商家で良いので良い教師を招いて、その子弟のために夜間学校を開いて欲しい。」

開港後に新しい文化に触れ、発展していく神戸と取り残される感のある兵庫の焦りのようなものが感じられる投書である。

ただ、開校当時、神田兵右衛門ら一部の兵庫の有力商人らが、英語教育の振興に力を取り組んだのは前述のとおりである。

5.2 設置時期の偏り

学校の設置は明治 20 年頃までは、外国人キリスト教宣教師や教団による設置が主な推進力となった。

1899 年（明治 32 年）の居留地返還に伴い、それまでよりもさらに外国人との交流が増え、英語の必要性も増えると感じた、日本人による学校設立が行われたものと考えられる。

この点について『市史』では次のように述べている。

「専ら英語、漢学、数学、法律、簿記、女子手芸等を教授する私立学校につきてはその明治十八年以前

の統計を欠けど、明治二十年校数九、生徒五百五十人ありて、前年より三百人多く、二十四年には十三校七百五十人なり。然るに二十五年以降是等の私学漸く衰え、設立認可を経て開校せず遂に認可の効力を失いしもの二十七年に十三校あり。同年開校中のものは十三校ありしかど、生徒は三百人に達せず、三十年には更に減じて六校二百人となれり。然るに三十二、三年頃より私立学校の開設次第に増加し、明治四十二年に至りて三十七校生徒三千六百人を超え、大正七年には四十五校七千人に達す。」[34]

英語を専門に教授する学校だけではないが、おおよその私立学校設立の「波」がわかる記述である。明治20年代後半から衰退したが、30年代、つまり条約改正と居留地返還を契機に再び英語教育の必要性が認識され、学校設立が増加し、学習者も増加していったものと思われる。

5.3 神戸、兵庫の住民の気質と女子教育

兵庫と神戸の住民の気質の違いも、学校設立や教育に対する意識の違いに反映されていると考えられる。

「神戸に在りては、既に明治二年長崎人横山某写真を開業し、同三年市田左右太亦市中に開業し、神戸土着の人民は未だ然らざりしも、殖民たる新来者は、写影して人に示すの時に於いて、兵庫人民の大数は道ふ、撮影すれば其命を縮むと。明治五、六年の頃、神戸の市中牛肉店数件を見、一番踏切の山手には西洋亭なる洋食店を見たるに、兵庫市中一の牛肉店を見ざりき。神戸市中に白歯の婦人を見る、兵庫婦人は総て涅歯にして眉なき婦人なり。明治七年神戸に於いては、三菱会社支店詰某の妻東京より来て、丸髷なる結髪法を広めて流行せり、兵庫の婦人は依然「さつかうがい」勝山に結び居たり。神戸の商家は洋人の為に学び、開業等に漿酸提灯を点じて景気を添へ、兵庫の商家は開店等の派手なるを見て之を忌む。曾ては神戸の地に在る農民等、兵庫人士の何事にも派手なるを指弾せり。今は兵庫の人民は、神戸人士の新奇に趨るを冷評す」[33]

神戸においては新しく定住した人々が新しい事業やファッションに馴染んでいく一方で、古くからの価値観や習慣から抜け出せない兵庫の人々との違いを描写したものである。

女子教育についても神戸ではキリスト教宣教師によって設立された学校による教育が盛んになりつつある頃、兵庫では対する意識については、以下のような記述が見られる。[34]

「神戸部に於いて女子教育の盛んなるに対して兵庫は極めて冷淡にして女子教育の必要未だ深く唱導さるるに至らず、父兄の女子を教育するや、依然としてお針稽古を以て限度とし、智育の如きは其問ふところにあらず、挿花抹茶の女芸さへ、商家の女子に過分の教育と思惟せられ、僅々上流商家の女子の学ぶに過ぎず、女子の高等学芸、精神薫陶の必要は、未だ兵庫の父兄の念頭に上らざりしなり」

兵庫の人々、特に商家の人々の女子教育に対する後ろ向きの姿勢を批判するものであるが、兵庫での学校設立が少ない事実を見れば、このような考えが当時の商家にとって支配的な考えであった様子がわかる。

5.4 公教育の立ち遅れ

明治年間に、英語を教授する私立学校の設立が盛んであったのに対して、官立、公立の学校については、英語教授の始まりとなった洋学伝習所や洋学校以降、1878年（明治12年）商業講習所内に設置された英語講習所がある。しかし、退学者が多く、1881年（明治15年）には商業講習所に吸収合併された。35）その後は神戸高等商業学校、県立中学や師範学校での英語教授の例があるが英語（外国語）を専門に教授する学校としては1946年の神戸市立外事専門学校（1949年に新制大学として神戸外国語大学に移行）の設立を待たねばならない。

また、公教育による女子の中等、高等教育の立ち後れが甚だしく、1898年当時に全国に公立女学校が29校を数えた時、兵庫県内には全くなく、最初の県立高等女学校ができたのは1901年（明治34年）である。[36]

6. まとめと課題

6.1 まとめ

開港期の兵庫はすでに流通の拠点となっており、新規に居留地を設けることができなかった。そのため、神戸村の浜辺が最低限の施設が存在したことがきっかけとなり、開港場に選ばれた。

外国との通商が始まるに及んで、英語の必要性が高まった。兵庫県では洋学伝習所、洋学校の設置、地元有力商人による、学校が設立されたが、大阪に洋学校ができたことで、廃止せざるを得なくなった。

開港間もない神戸居留地および雑居地では、諸外国

からのキリスト教各会派の宣教師たちが布教活動を行なった。その一環として学校を設立し、神戸の若者に英語を教授することでキリスト教を広めていった。特に等閑視されがちであった女子教育に対する尽力は並々ならぬものであった。

居留地返還後もさらに学校設立は続いたが、設立後、まもなく廃校となる例も相次いだ。

兵庫にも学校は設立されたが、その数は神戸には及ばず、英語や新しい文化に対する両地域の住民の価値観や意識の違いを浮き彫りにした。

6.2 課題

神戸における英語教育の始まりにおいて、英語の必要性について、当初は外国との通商上の必要が強調されていた。しかしながら、キリスト教宣教師による布教活動の一環としての学校設立による英語教授は、そのような実用性の観点からの英語教授、英語教育の必要性について、異なる視点が必要になるのではないだろうか。この点に関しても別途考察の必要がある。

先に述べたように、神戸においては、官（国）立、公立学校の中等教育、高等教育の立ち上がりが遅かったこと、公教育における英語教授の系譜に関しては稿を改めたい。

本稿で取り上げた学校の多くは設立後に間も無く廃絶に至っている例が多い。これらの学校ににおける英語教育の実態については、ほとんどわかっていない。さらなる資料の検索、発掘も課題として残る。

注

1）学校制度上の学校だけではなく、いわゆる「私塾」、「個人経営の塾」の形態も含んでいる。
2）『新修』pp.5-8『県史』pp.6-8
3）生田川はたびたび氾濫を起こし、居留地造成に影響を与えたため、明治4年に流路を付け替える工事が行われた。その結果、元の川筋は道路、公園となり、現在に至っている。
4）『県史』産業経済編　総論 p.13
5）市制施行以降、明治期後半の神戸市の市域はおおよそ現在の神戸市中央区から長田区の一部を含んだ区域である。
6）『日本近代都市変遷地図集成』（1987）柏書房より
7）同上
8）『日本教育史資料』（pp.304-305）
ただし、『市史 』本編各説では14ヶ所と記載されている。p.569
9）『市史 各説』pp571-
10）箕作麟祥
11）『御雇』p.359「ビゲロー」の表記。本資料には神戸における事蹟の記録はない。
12）『三十年史 乾』pp.280-281
13）同上 pp.286-287
14）『御雇』p.458「リュトロンクワ」の表記。
15）『三十年史 乾』pp.388
16）『御雇』p.217　雇用期間は3ヶ月であった。
17）『神戸女学院百年史総説』pp.3-16
18）同上 pp.20-21
19）旧三田藩家老、白洲次郎の祖父
20）『基督教』p.25
21）同上 p.93
22）同上 p.102
23）同上 p.117
24）2014年に廃校となった。
25）以下、各学校について煩雑さを避けるため、出典資料を略称により併記する。
26）『神戸港』p.227に「日本学生用独立夜学校」との記載があり、場所、設立者氏名より、「バント英学校」と思われる。
27）居留地北側に面した通り
28）『神戸市統計書』明治39年から大正元年
29）『神戸市統計書』明治38年から大正元年
30）『三十年史 坤』p.308
31）『三十年史 坤』p.310
32）「又新日報」明治19年4月28日
33）『三十年史 乾』p.579
34）『権勢史』p.308
35）『兵庫県教育史』p.105
36）『兵庫県教育史』p.280

参考文献

＜公式記録＞
『神戸開港三十年史　乾坤』（『三十年史』）
開港三十年紀念会(編)1898
『神戸区教育沿革史』（『沿革史』）
神戸小學開校三十年記念祝典會(編)1915
『神戸市史』（『市史』）神戸市役所(編)1921
『神戸市統計書』（第1回，第3回－第8回）
神戸市役所(編)1907，1909-1912
『神戸女学院百年史　各論』『神戸女学院百年史　総説』
神戸女学院百年史編集委員会(編)1976
『兵庫県史』兵庫県史編集専門委員会(編)1974（『県史』）

『兵庫県教育史』兵庫県教育史編集委員会(編)1963
＜資料＞
『日本教育史資料』
『資料御雇外国人』(『御雇』)
ユネスコ東アジア文化研究センター(編)1975 小学館
＜著書＞
『神戸権勢史』(『権勢史』) 本郷直彦 1913 平野宝盛堂
『神戸港』田中鎮彦(編)1905 神戸港編纂事務所
『神戸大観』(『大観』) 平井俊三(編)1915 神戸大観編纂所
『神戸と基督教』(『基督教』) 吉野丈夫 1975
神戸キリスト教書店
＜地図＞
『日本近代都市変遷地図集成』 地図資料編纂会(編) 1987 柏書房
＜新聞＞
『又新日報』

On English Language Schools Opened during the End of Edo Period to Meiji Era in Kobe: Focused on Private Schools

Faculty of Liberal Arts, Department of English as an International Language
Takashi SUGIURA

Abstract

The present study investigates when and how English language education started in the city of Kobe. After concluding the Treaty of Amity and Commerce between the United States and other European countries in 1853, Japan opened five ports to the foreign countries. First, Hyogo was supposed to be opened, however its crowdedness made Bakufu, the military government avoid opening the port.

Compared to the crowded city of Hyogo, Kobe was a small deserted village with a few unloading/discharging facilities and a small dock on the beach.

This desertedness lead Bakufu and the new Meiji government to build Foreign Settlement and Mixed Residential Area in Kobe.

With the opening of the port, the prefectural officers founded an English education institute in Hyogo with a view to encourage studying of English for business and trade with foreign countries. However, it was soon abolished and unified to a foreign language school established in Osaka.

Meanwhile, many missionaries from various sects began working in Kobe. Some of them worked for founding English teaching schools to women.

The same kind of private schools and other small cram schools were built mainly in Kobe, but many of them were abolished in the Meiji Era.

This paper clarifies Christian missionaries had an important role in promoting English in Kobe, and that the difference of natures of people in Hyogo and Kobe affects the degree of the promotion of English education and woman education in both cities.

Keywords: Kobe, End of Edo Period, Open Port, English Studies, English language education